

マイノリティ， 9・11， 国外の戦場

—— 現代米国における小説の様相 1999年－2003年 ——

長 岡 真 吾

1 はじめに

1999年から2003年にかけて、私は現代米国における文学状況を回顧する文章を書く機会を与えられた。個人的にはあくまで恣意的な5年間であったのだが、偶然にもその間に、米国にとって、そして世界全体にとっても大きな変化をもたらす事件や出来事が次々に勃発した。後の歴史家や批評家は必要や要求に応じてこの変化を定義し、また再定義していくであろうが、時代の変化が劇的に視覚化され、また、モニュメント（記念碑）化された5年間であったという点ではおそらく一致するに違いない。その根元的な時代変化は、単にカレンダーがめくられて世紀が変わった、あるいは第三期ミレニアムに入ったというような祝祭的認識によるものではなく、2001年9月11日に米国中枢部へのいわゆる「同時多発テロ」が起こったことが、様々な時代変化を象徴する「引き金」めいた記号として認識されたことに依拠する。進化生物学者のS・J・ゲールドは、19世紀と20世紀の時代文化的な境界を第一次世界大戦終結（1918年）に定める歴史家が多いことを引き合いに出しながら、「未来の年代記編者たちは、第三期千年期の始まりを2001年9月11日の日付に定めるのではないか」(xi)と述べて、その日付以前と以後とでは決定的な変化が生じたという認識を明らかにしている。1999年から2003年までの5年間は、その時代に潜在的または顕在的に進行しつつあった様々な変化を、その期間の中心で起こった「9・11」によって一気に抽出し、それ「以前」と「以後」を対称化し、目に見えるモニュメントとすることで、その無比の特異性を獲得したのである。

無論、ここで取り上げる「5年間」という数字に説得力のある根拠を与える意図は本稿にはない。単に「9・11」を中心としてその前後2年半を恣意的に切り取っただけのことである。しかし、同じ2年半であっても、前半と後半では大きな差異があることは明白である。その差異の振幅を、文学分野、特に小説の動向に重点を置いて考察した場合、どのような特色が見えてくるのか、そ

れが本稿の課題である。

小説とはそれ自体が虚構であるという前提をその存在論的な差異のうちに含んでいる。小説の虚構性は、しかしながら現実とは関わりのない地平から生み出されるものではない。小説の言葉は、常に現実に向けて発せられるものであり、それを発する者は現実の「市民」であり、生身の「人間」であり、特定の歴史・社会・文化に属した「一員」である。あらためて確認するまでもなく、ポスト構造主義以降の文学研究が、古典的な意味での「文学」の枠組みを越境し、新歴史主義、フェミニズム、カルチュラル・スタディーズ、ポストコロニアルといった、常に個別で具体的な政治性を含み込んだ視点から展開してきたことも、文学の虚構性が現実の「現実性」と地続きのごとく連続していることを間接的に例証しているといえる。小説の虚構性は、「現実性」が孕む不可視の「虚構性」を意図的に可視化することによって、その「虚構性」がいかにより様々な政治的意志と結びついているかを明らかにしてきたのである。現実の方に秘められた「虚構性」の方こそ、政治が発動し、その効力を持続させる場所にはかならない。

こうした問題意識を踏まえて、1999年から2003年までの米国における小説を中心とした文学の動向を以下に俯瞰する。ただし、それぞれの文章は、それぞれの時点で書かれたほぼそのまゝの状態で記載されている（したがって、「今年」や「本年」、「昨年」などとあるのは、それぞれの年度を基準にしている）。少なくとも本稿では、「9・11」そのものの意味を考察することが目的ではなく、その前後の米国小説の様相の一端を明らかにすることが主題である。そのために、「9・11」からの視点のみで5年間を回顧するのではなく、その時点の記録をそのままの形で提示する。

2 年度別総括⁽¹⁾

（1）1999年の総括

ミレニアム直前にしては、というべきか、比較的静かな一年であった。一言でいえば、熱狂なき豊穡、とでも呼べるだろう。11月に発表された全米図書賞がある意味で今年を象徴していた。50周年を迎えた同賞の小説部門にはいきなりハ・ジンの『待ち暮らし』が輝いた。ジンは1985年に中国から米国に移民してきたばかりであるうえ、受賞作は、1960年代中国北部に住む軍医が、親に決められた見合によって結婚した文盲・纏足の妻と離婚し、看護婦と再婚しよう

として18年もかかってしまうという,「アメリカ」がどこにもでてこない話である。10月に出版された本書がその翌月に権威と伝統ある文学賞に輝いたことは周囲を大いに驚かせ,パブリッシャーズ・ウィークリーなどは「予想外」を公言してはばかりず,ニューヨーク・タイムズも「中国を舞台にした小説が受賞」と見出しをつけた。下馬評で呼び声の高かったケント・ハルーフの『ブレインソング』は「アメリカのハートランド」にある小さな町を舞台にした,孤独で寄り添えない人々の物語であるが,こちらのほうが白人中産階級の大多数の読者にとってはまさに「自分たち」のことが書かれている作品だったのかも知れない。

アジア系といえば韓国系アメリカ人のチャンネ・リーの『最後の場所で』もハードカバーのベストセラーリストに長くとどまっている。韓国,日本,合衆国と三つの国を生きてきた元軍医が,第二次大戦中の慰安婦をめぐる記憶を呼び覚ます物語である。相変わらずジョン・アーヴィングやアリス・マンロー,本年度ピューリッツァ賞受賞のマイケル・カニンガム,トム・ウルフらの去年の作品が売れ続けているなかにあって,今年出版された純文学系では健闘している一冊である。今年はナボコフとヘミングウェイの生誕百年にあたるが,一世紀以上の歳月を経て発表された後者の新作「トゥルー・アト・ファースト・ライト」(邦訳名『ケニア』)も今年のベストセラー入りをした。しかし,久しぶりの新作といえはなんといってもラルフ・エリソンをおいてほかにない。40年以上にわたって話題であり続けた幻の「第二作」が,遺稿を編集したものとはいえ『ジュンティーンズ』と銘打って大々的に発表されたのは,今年のもっとも大きな事件であったといえるだろう。

注目された小説としては,28歳の新鋭ネイサン・イングラダーの,ニューヨークのユダヤ人街からイスラエルやロシアまで広がる短編集『フォア・ザ・レリーフ・オブ・ジ・アンビアラブル・アージズ』,『白鯨』の時代を女性の観点から語り直したシーナ・ジェター・ナスルンドの『エイハブの妻』,南北戦争を背景としてハーマン・メルヴィルとおぼしき人物が登場するフレデリック・ブッシュの『ザ・ナイト・インスペクター』,合衆国におけるインド系アメリカ人の孤立をアイロニカルに描いた新人ジャンパ・ラヒリの『停電の夜に』などがある。また,『ベスト・アメリカン・ショートストーリーズ・オブ・ザ・センチュリー』も,84年間のシリーズを総括する世紀末アンソロジーとして好評を博した。日本でもよく知られている作家の新作としては,アニー・ブルーの『クロース・レインジ』,ポール・オースターの『偶然の音楽』,ジョン・アッ

ブダイクのエッセイ集『モア・マター』、デイヴィッド・フォスター・ウォーレスの『ブリーフ・インタビュー・ウィズ・ヒディアス・メン』、スティーヴ・エリクソンの『真夜中に海がやってくる』、バリー・ユアグローの『ホーンテッド・トラベラー』などがあった。11月に入ってスティーヴン・ミルハウザーの『エンハンスト・ナイト』とウィリアム・ギブスンの三部作完結となる『オール・トゥモロウズ・パーティーズ』も立て続けに出版された。ファンからの評価は前者は賛辞が多く、後者は失望が目立つ。闇雲に『ニューロマンサー』と同等かそれ以上の衝撃を期待されるのも辛いところがある。

全体にベテラン作家は健在と成熟を印象づけ、新進作家はもはや「合衆国」の枠内に止まらない傾向を一層顕著に示した年であったといえよう。国家の枠を越えた先駆者の一人、ポール・ボウルズが11月にタンジールで逝去。88歳の犬御所の死は20世紀の終わりにふさわしい。されど、その死を心から悼む。

（2）2000年の総括

本年7月16日付のワシントンポスト紙において歴史学者のマリリン・ホルターは食品を始めとするあらゆる商品においてマイノリティ色の強いもののほうが市場性が高くなっている現状に注目した。その背景にはマイノリティがかつてのように「アメリカ人」に同化しようとするのではなく、あくまで主体的に自分自身の歴史を再構築することによって文化的アイデンティティを回復させようとする大きな流れがあると述べているが、更に興味深いことに、マジョリティのほうもまたマイノリティ向けのものをより多く購入する傾向にあるという。「同化」が以前とは逆の方向、すなわち、マジョリティからマイノリティへ、という方向を持ち始めているとホルターは指摘する。最近の文学業界もそれと同じ二つの流れのなかにあるように思われる。

4月のペン・フォークナー賞は昨年度の全米図書賞の受賞作であるハ・ジンの『待ち暮らし』が選ばれ、同月のピューリッツァ賞小説部門には同じく昨年発表されたジュンパ・ラヒリの『停電の夜に』が輝いた。ジンは中国系作家で作品の舞台も文革時代の中国であり、ラヒリはインド系の作家でインドと合衆国の両方を舞台にした短編集になっている。こうした「アメリカでないもの」の文化と歴史をモチーフにするという傾向は、今年度ではスーザン・ソントグの『イン・アメリカ』に微妙な意味で継承されている。この作品は1960年代から評論、小説、ノンフィクション、戯曲、映画とあらゆる分野で活躍し続けるソントグの最新小説であり、先月発表になった全米図書賞の小説部門を受賞し

た。現実の歴史と作者の虚構との間の境界線を自由に突破したものとして論争を呼んだ作品である。現代のアメリカ人少女が吹雪の晩に通りがかったホテルで開かれているパーティに紛れ込む。ところが参加者たちはみな古風な装いで、しかも馬車に乗ってやってくる。パーティの主賓は伝説的な女優メアリーナ・ザレゾフスカ。少女が紛れ込んだ時空間は1876年のワルシャワであるばかりか、そのパーティ自体が少女自身が想像し、作り上げたものであった。これが本作品の冒頭である。批評家たちの指摘によれば、ザレゾフスカは19世紀に実在したポーランド生まれの大女優ヘレーナ・モジェスカ（後に米国に移住）をモデルにしているだけでなく、彼女自身が書き残した文章がほぼそのままの形で挿入されているという。ただし、何の注釈も出典への言及もなしに、である。他にもモジェスカについて書かれたものからの引用や、ポーランドのノーベル賞作家シェンクェヴィチ、ウィラ・キャザーらの文章が、バロウズのカットアップとまではいわないまでもそれに近い「技法」で多用されている。本作品をポストモダン小説と見るむきがあるのは当然だが、題名に端的かつ暗示的に現れているように「アメリカでないもの」への逆同化の流れを複雑な形で孕んでいるとも考えられるだろう。ソントグ自身はモジェスカらをソースとして利用しただけであり、自身の創作のために「完全に変容させている」と弁明している。

ソントグのほかにもベテラン作家の充実した作品が目立つ。1990年代を通して精力的に作品を発表してきたフィリップ・ロスは、小説『人間の汚点』を上梓し、人種、階級、宗教がぶつかりあう前線の問題を精緻に描いた。チャールズ・バクスターの『愛の饗宴』は、複数の視点を交錯させることにより人々との繋がりとその困難さについての巧妙な物語を編み上げ、全米図書賞の候補に選ばれた。他にもジョイス・キャロル・オーツ、ソウル・ベロー、ゴア・ヴィダル、アーミステッド・モーピンらが新作を発表している。しかし、その中でも特に注目すべきはやはり今年二冊の小説を上梓したジョン・アップダイクだろう。一冊は『ガートルードとクロード・ディアス』であり、題名が示すとおりシェイクスピアを下敷きにすると同時にアップダイク的に「変容」させた作品である。もう一冊は『リックス・オヴ・ラヴ（愛の舌触り、と訳しておく）』という短編集であるが、この中に含まれる中編は「ラビット」シリーズの後日談として位置付けられる続編であり、ラビット・アングストロームにとってのアメリカ合衆国の歴史と彼が関わった人々の現在の生き方を巧みに融合させている。

中堅・新人の作家たちの活躍も劣らず活発であった。俯瞰して気づくのは、

作品の舞台が合衆国国内に限らず世界各地に広がり、それぞれの歴史を題材にしたものが極めて多いということであろう。歴史の小文字化が一層進んできたというべきか。また、ゼイディー・スミスやマーガレット・アトウッドらへの高い評価を例にとれば「アメリカ文学」という境界は事実上消滅しているようにも見える。そういう意味でもミレニアムとしての今年一年は次の展開への動きを漠然と予感させる爛熱の幕間であるといえるかもしれない。

(3) 2001年の総括

9月11日午前7時59分ごろ、乗客乗員92人を乗せたアメリカン航空11便がニューヨーク、マンハッタンにある世界貿易センタービル北棟に激突した。その約15分後には、もう一機の旅客機が65人の乗客とともに同ビルの南棟に激突した。同じころ、別の旅客機が国防総省ビルに激突、また、もう一機別の旅客機がペンシルベニア州南部に墜落した。「同時多発テロ」と名付けられることになったこの大事件は、「ツインタワー」と呼ばれた世界貿易センタービルを完全に倒壊させ、死者および行方不明者は合計で3,900人を越える惨事となった。この「9月11日」を境に2001年の米国は完全に二分された。さらに、米国はこのテロ事件の首謀者をアフガニスタンに潜伏するイスラム原理主義組織を率いる人物と断定して、自ら世界全体を明確に二分した。「テロリズム」と「正義」に、「聖戦（ジハード）」と「自由を守る闘い」に、そして「敵」と「味方」に分け、事実上戦争に突入した。本年度を概観するには、どうしても「その日」以前と以後に、通常の米国と戦時の米国に分けてしなければならない。まずは前者から眺めていくが、もっとも話題となった小説は「以前」の最後に発表されたものである。

ジョナサン・フランゼンの『コレクションズ』は9月はじめに出版されるやいなや瞬く間に各紙の書評で高い評価を得て、ドン・デリーロやD・F・ウォーレスらの作家からも絶賛された。オーブラ・ウィンフリーのテレビ番組「ブッククラブ」でも取り上げられてベストセラーになり、11月の全米図書賞では小説部門を受賞した。『コレクションズ』は中西部を舞台にした白人中流階級の家族の物語である。結婚し母となつてからほぼ半世紀を迎える一人の母親が、もう一度家族みんなでクリスマスを迎えたいと望む。老いた夫には痴呆が始まり、これが「最後の」機会だと考えた彼女は、離散した子どもたちを呼び戻そうとする。しかし、三人の子どもはそれぞれに問題を抱えている。年長のゲイリーはかつては手堅い職に就き結婚して家族の面倒をよくみていたが、

現在は鬱病に悩まされている。二番目のチップは大学で教職を得て安定した人生を歩むかと思われた矢先に女学生を誘惑したかどで免職になり、脚本家に転職するもうまくいかない。末娘のデニースは一方で人気のあるシェフでありながら、複雑な不倫関係に巻き込まれている。登場人物それぞれの内面をありのままに描き出し、また紡ぎあわせようとするフランゼンの視点は楽観的でも予定調和的でもない。夫に反対し、妻に不満を訴え、父や母を疎みながらも気遣い、しかし責任はできるかぎり回避しようとする家族それぞれの姿からは、ある種の硬質な存在感を持つ日常が浮き彫りにされる。会話に会話を繋ぎながら進行する本書の物語は、言葉をかけ合ったり一緒に時間を過ごしたりするありふれた家族の日常と、その日常に与える意味や価値が、世代や個人によって大きく異なることを徐々にあぶり出していく。この物語をアメリカ中産階級が典型として抱く理想的な家族観へのアイロニーと捉えることも可能だろう。しかし、原題が「訂正・修正」を表す言葉の複数形となっているように、常に家庭の現場では訂正が施されていくものであり、またそのプロセス自体がほかならぬ家族の絆そのものであることも示唆している。フランゼンは1959年イリノイ州の生まれ。本書への批判としてエリート主義的過ぎるという意見があることも付け加えておく。

アフリカ系作家の科尔ソン・ホワイトヘッドの第二作『ジョン・ヘンリーの日々』も高い評価を得た作品である。まだ30歳を過ぎたばかりのこの作家は、二作にしてすでにジョーゼフ・ヘラーやトニ・モリソン、そしてピンチオンにさえ比べられている。題名のジョン・ヘンリーは1870年代に実在した黒人の鉄道作業員で、超人的な体力とスタミナを誇り、最後には蒸気削岩機と競争して勝利を収めたものの、直後に疲労から急逝したといわれている。1996年、この伝説的な人物を記念して切手が発行されることになったのに伴い、ウエスト・ヴァージニアでフェスティバルが開かれることになる。そこへ、本作品の主人公である若き黒人ジャーナリストが取材に来る、というのが物語の始まりだが、彼はあちらこちらの催しを回ってはできる限り経費を濫用する雇われ記者である。19世紀に急速に進んだ産業の機械化を背景にした伝説と、20世紀末のデジタル情報化社会を生きる若者たちを対比しつつ、伝説に取り憑かれた人々をはじめジョン・ヘンリー当人をも織込みながら、「力」についての価値観が変化した現状を滑稽なまでに際立たせている。時折見られる比喩の見事さは特筆に値する。

また、アン・パッチェットの第四作めとなる『ベル・カント』も穏やかに評価

を上げてきた。南米の某国で日本の大物実業家や各国からの要人を招いた誕生パーティが開かれるが、そこへ突如としてテロリストたちが侵入し、58人もの国際的な人質をとって数カ月も籠城するという物語である。1996年末に実際に起こった日本大使公邸人質事件を彷彿とさせる設定だが、人質と犯人それぞれの内面を描き出しながら、アメリカ人ソプラノ歌手の歌声によって人質とテロリストたちの間に生まれる奇妙な連帯感をマジックリアリスティックな手法で浮かび上がらせている。パチュットはデブラ・スパークが編者となった『20アンダー30』（1987年）にも寄稿していた、といえは思い当たる向きもあるかもしれない。

以上の他にも中堅・ベテラン作家ともに精力的に活動している。ジョン・アーヴィングは『第四の手』を、ジョイス・キャロル・オーツは『不貞——罪の物語』を発表、また、68歳のフィリップ・ロスは昨年度の『人間の汚れ』で4月のペン／フォークナー賞に輝いたが、引きも切らず『死にゆく動物』を上梓した。これには『乳房になった男』の主人公が老人で登場するという。70歳を越えたジョン・バースも『登場間近！——ア・ナラティヴ』を出した。ドン・デリーロにしては異色の小編『ボディ・アーティスト』も話題になった。アン・タイラーの十五作目『昔、大人だった頃』は53歳の母親が自己の人生を最後に肯定していく物語である。ケネディ兄弟二人の暗殺の間の5年間における裏の世界を描いた『ザ・コールド・シックス・サウザンド』は、いかにもジェイムズ・エルロイらしい小説となっている。他に、ルイズ・アードリックとエイミー・タンが新作長編を、アン・ビーティ、ボビー・アン・メイソン、リック・ムーディらがそれぞれ短編集を発表した。また、故ポール・ボウルズのイスラム世界を題材にした短編集がひっそりと10月に出版されていた。合衆国以外の英語圏では相変わらずアリス・マンローが高い評価を維持し、また、12月に惜しくも57歳の若さで急逝したドイツ生まれのイギリス作家W・G・ゼーバルトの『アウステルリッツ』や、オーストラリアのピーター・ケアリーの歴史小説などが称賛された。詩の分野ではアラン・デュガンの『ポエムズ・セヴン』が全米図書賞の詩部門に輝いた。硬派の詩人として鳴るデュガンの40年間の集大成とも呼ぶべき詩集である。ピューリッツァー賞の詩部門にはスティーヴン・ダンの十一作目となる詩集『異なる時間』が選ばれた。『セイリング・アローン・アラウンド・ザ・ルーム』は一般にも好評を博し、合衆国桂冠詩人ビリー・コリンズの面目躍如となった。また、ここで物故者を挙げておくならば、11月にケン・キージー亡くなった。享年66歳。他のベテラン作家の活躍を思えば早

すぎる死である。

さて、3月の全米批評家協会賞は英国作家ジム・クレイスの『死んでいる』が、そして4月のピュリッツァー賞ではマイケル・シェイボンの『カヴァリエ & クレイの驚くべき冒険』がそれぞれ小説部門で選ばれていた。後者の物語は第二次世界大戦前後の時代が舞台となっており、主人公の劇画家が「エスケープリスト」という「スーパーヒーロー」を産み出し、それが大当たりしたのもつかの間、ヒトラーから迫害されている人々を救うという筋であったために米国内のナチス信奉者から狙われることになったところから「冒険」が始まる。主人公らのユーモラスな性格や逆境に立ち向かう快活な勇敢さにもかかわらず、「同時多発テロ事件」以降の情勢を踏まえて読み直すならば、殺戮や戦争の描写、また真珠湾奇襲のニュースが入る場面などでは、むしろ奇妙な既視感と重なってしまう。「その日」以後の状況に移ろう。

9月11日は作家たちに深刻な影響を与えた。例えばボビー・アン・メイソンは登場人物が飛行機に乗る場面を書く場合には、たとえ作品のテーマとは関わりがないにしても何らかの恐怖を意識せずにはいられなくなったと述べた。トラウマとしてのヴェトナム戦争を書き続けてきたティム・オブライエンは事件の刻印から逃れられる作家などいないとし、「今もヴェトナム戦争は続いている」と訴えた。多くの作家が小説を書くこと自体の意味を問い直さなければならない状況に直面したと異口同音に告白した。世界貿易センタービル的事件を一マイルと離れていない十階のビルから目撃したジョン・アップダイクは、直後の『ニューヨーカー』誌においてその恐怖を生々しく語りながら、ハイジャック犯人たちを「カミカゼ」特攻隊員になぞらえた。そして、すべての旅客機が運行を取りやめた空の静寂さに対して「しかし我々は再び飛ばなければならない。危険は自由の代償なのだから」と、押し寄せる無力感を振り払って主張した。スーザン・ソントグは、テロの犯人たちを「卑怯で臆病」という言葉で片づけアメリカの威信は揺るがないと「ロボットのように」繰り返す大統領サイドやメディアの一樣さを鋭く批判し、対中央アジアの外交政策についての現実を隠蔽するものだとし糾弾した。そして「私たちは一緒に悲しもう。しかし一緒に愚かになってはいけない」と訴えた。しかし、サイドやチョムスキーらの政府批判をよそに、一方的に「愛国心」を煽る勢いは止まらず、コロンビア・レコードのCD「ゴッド・ブレス・アメリカ」は急な増産体制を迫られるほど売れ、インターネットの各種掲示板でもあからさまに反イスラム、反アラブを唱えるメッセージが横行した。そんな風潮のなかで、例えば10月28日付の『ワ

シントンポスト』紙に掲載されたある記事は、白人マジョリティの「愛国心」がアフリカ系アメリカ人側から見た歴史からすれば主権維持のための手段であった点を指摘し、それに反対すればかつてのマッカーシズムのように迫害を受ける可能性があることを訴えていた。これは、すべてのマイノリティ作家が多かれ少なかれ感じていたある種の社会的抑圧を代弁する意見であるとも考えられる。例えば、アラブ系作家が今回のテロ事件への報復として米軍が行った軍事行動を批判するような小説を書いたとしたら、果たして受け入れられるだろうか。「二分された」米国の今後の文学状況については予断を許さない点が多々残されている。

(4) 2002年の総括

2002年におけるアメリカ合衆国の文学は、一方では一見通常通りとも思われる創作活動が進行しつつ、他方では歴然として前年9月11日の同時多発テロ事件の残響のなかにあった。「9・11」によって何かが決定的に変化したと感じ取った作家や芸術家たちは、どのようにしてその変化を、また自分自身が受けた衝撃を表現すればよいのか、苦悩しつつ模索していたように見える。事件後からその年の暮れまで、「9・11」に反応した展示会がニューヨークのあちらこちらのギャラリーで開催され、またインターネット上でも部分的にはそうした展示会と連動しつつ数多くの個人的な表現活動が横溢した。私自身は実際にニューヨークに行くことはできなかったが、インターネットで紹介されているポスターやエッセイ、そしてもちろん夥しい数の写真を目にした。また、芸術家以外の人たちの率直な体験談もできる限り拾い読みをした。こうした数多くの個人の言葉が全体として描いていたものは、「悲しみ」と「癒し」であった。このふたつの言葉は幾度となく繰り返され、また至る所で目にした。

この二つの言葉が不可避免的に自己言及してしまう凡庸さや陳腐さこそ一方で「9・11」の衝撃の大きさを裏付けるものであることはいくまでもないが、他方ではそれを芸術や文学の対象として考えた場合、いくつかの疑問点が提示されたことを紹介しておこう。たとえば2001年12月30日付の『ワシントンポスト』紙は、芸術としての表現と、いわば「生のまま」のそれとを区別する必要があると主張し、「悲しみ」と「癒し」一辺倒の表現活動に、ある種の時間的距離感が備わってはじめて芸術に値する形を獲得できるという認識を批判的に提示した。それにしたがっていえば、年明け1月の末から3月にかけていくつか開催された表現活動のなかでも「熟考すべき時——9・11へ芸術からの反応」

と題してニューヨークで行われた一連の展示活動は、過去を過去として見つめつつ意識を未来に向け始めた表現活動であったといえるだろう。一般には大々的にポスターの展示が行われ、特設会場では芸術家、デザイナー、建築家などによる作品展示に加えて、詩人による朗読も行われた。「クリエイティヴ・タイム」という非営利団体が提唱し、全米最大規模の文学法人である「詩人と作家」なども協賛して開催されたこの催しは、単に「9・11」による心的外傷を表現するのではなく、政府への批判も含めて様々に異なる視点を同時並列して提示したといえるだろう。この催しに端的に象徴されていると感じたのは、「9・11」が否応なく形成してしまう歴史的あるいは政治的全体性にたいして、差異としての個別性を尊重し、ひとりひとりの個人が語ろうとするそれぞれの記憶をその多様さのままに受容しようとする姿勢であった。この二つの流れ、すなわち一方では「悲しみ」と「癒し」（そして9月11日の一周年が近づくにしたがって「思い出す・記憶する」という言葉も加わった）という単純で素朴な言葉によって「9・11」を語らざるをえない方向性と、そこから様々に分岐して変容する個々の表現活動並びに少なくとも表面上はその多様性を受容していく方向性が、2002年前半の米国における諸文化活動全般に見受けられたように思う。

文学分野においてこうした流れが可視化された例としては、7月に出版された『2001年9月11日——アメリカの作家たちが答える』（W・ヘイエン編、イトラスカン・プレス刊）をまず上げることができるだろう。同書は127人にもおよぶ作家や詩人たちのエッセイ、短編、詩を収録したアンソロジーである。編者のヘイエンはホロコーストや湾岸戦争を題材にした詩集や時代を形象化するがのようなアンソロジーの編者として知られ、創造的洞察力和歴史意識を劇的に融合させる才に長けた詩人として評価が高い。目に付いた寄稿者には、テス・ギャラガー、マキシーン・ホン・キングストン、ルシール・クリフトン、イシュメル・リード、ジョン・アップダイク、アイ、ジョイ・ハージョらがいる。沈黙を強制するか、さもなければ数語の単純な言葉に囲い込もうとする事件の凄惨さに抗って、発することのできる言葉を模索しようとした様々な個人のプロセスが同書には集められている。書き手と読み手がそのプロセスを共有することによって、共に名状しがたい歴史的出来事の一部に直接触れていこうとするかのような体験が実現されていると思う。「9・11」関連の書籍はノンフィクションも含めると何百も出版されてきたが、同書は中でも想像力のみが可能にする、現実への創造的関与を言語化した一冊として長く記憶される

のではないだろうか。同種の他のアンソロジーとして『101ストーリーズ——9月11日の後ニューヨークは書く』（U・ベアー編、ニューヨーク大学出版刊）も上げておきたい。

「9・11」を語ろうとする欲求は、しかし、その意図に関係なく商業主義の文脈のなかで捉えられてしまう場合もある。たとえば9月11日付の新聞各種には、大手小売店から銀行に至るまで各社がこぞって一様の広告を出していた。多くは星条旗を中心に扱い、「わたしたちは思い出す・記憶する」という言葉を強調していたが、その声高に愛国的なイメージには、どこか商業主義のうさん臭さが感じられた。8月25日付の『ワシントンポスト』紙においてティム・カーマンは、同時多発テロ事件当日のうちに「2001年9月11日」という言葉そのものを登録商標化しようとした男の話を引き合いに出しながら、誰の言葉が金もうけ主義であり、誰の言葉がそうではないかを見極めることが極めて困難になっている状況を指摘した。「9・11」に触発された夥しい数と種類の商品を前にすれば、公に関わろうとする者は誰であれ「かつてないほど不安定なモラルの基盤」の上に立たされることになる」と述べ、意図に関わらず結果的に「9・11」を「商品化」してしまうことへのディレンマを問題視した。この文脈においては長編作家たちも決して特権的な立場にいるわけではない。それについて語ろうとする欲求を抱えたまま、しかし一方ではあからさまに「9・11」を題材にしにくいという状況で、「一見通常通りとも思われる創作活動」は通常通り続けられた。そのような2002年の特徴をあえて一言で表すならば、「新人作家の活躍」という言葉につきるだろう。

11月に発表された全米図書賞の小説部門にはニューヨーク市在住のフリー・ジャーナリスト兼編集者ジュリア・グラスによる『三つの六月』が輝いた。スコットランド系の家族を題材にした本作品の舞台は大西洋をまたがって三つの大陸に広がり、時間は1989年、1995年、1999年の三つの夏を軸に構成されている。親子関係や人と環境との繋がりをめぐる手堅い悲喜劇となっているようである。新人作家の処女長編がいきなりメジャーな文学賞を受賞したことに、本年度の小説の動向は端的に象徴されている。年末の『ニューヨーク・タイムズ』紙もそれを裏付ける数字を発表し、典型的な例は、商業的に堅実な選択をすることで有名なランダムハウス社が103ものデビュー長編／短編集を出版したことであるとした。この数字は同社にとって新人の出版の新記録になるという。セント・マーティンズ・プレス社やリトル・ブラウン＆カンパニー社についても例年より新人の比率が高かったという。

こうした傾向にいわば火をつけた一冊として、2002年の文学賞とは無縁であったものの、いわゆる純文学としては異例の長期ベストセラーになっているアリス・シーボルドの長編第一作『ラブリー・ボーン』を無視することはできない。同書は、たとえばニューヨークでもロスアンジェルスでも、6月末の出版以来継続してベストセラーリストの上位に上がったままになっており、その勢いは2003年が開けても衰える様子をみせない。1970年代を背景にしたこの作品は、暴行されて殺された14歳の少女が天国から自らの事件の顛末とその後を語る、という特異な設定を持つ。1973年12月の雪降る日、学校からの帰り道に顔なじみの隣人に会ったスージーは、彼がトウモロコシ畑の地面に一人で掘ったという隠れ家に誘い込まれ、レイプされた挙げ句に殺される。そして、証拠隠滅のために遺体を切断される。自身の殺害事件を当事者として証言するスージーは、彼女自身の「天国」にいる。そこは彼女なりに理想化された学校であり、天国に順応しつつ自らの死を受け入れるためのカウンセラーも付いている。事件後の両親や妹弟の様子を語るスージーは、死者でありながら、なお14歳から成長し続ける。死者でありながら未来を失わず、「いつまでも昨日のまま」である現世を、語ることによって理解しようとする。その意味では米国的な「成長物語」として本書を位置づけることができる。また、スージーの語りをあり得ない作り話として一笑に付すことなどできない。それは悲痛な願いと現実が、冷血と愛情が、社会の無関心と個人の尊厳が、交錯し共存する領域に属するからである。事件の描写など極度に生々しく、ジョン・アーヴィングばりに扇情的すぎるきらいもあるが、むしろこのような設定でなければ語りえないことを、シーボルドは強い想像力によって成し遂げている。「9・11」の遺族の姿とスージーの家族の姿をどこかで重ね合わせて読んでしまったが、それは愛するものを失ったとき「我々」はどうすべきなのか、常にわからないという不安に怯えているからだろう。本作が継続したベストセラーになっているのは、紛れもなく生身の現実につながる何かがあると多くの人が感じたからではないだろうか。

グラスやシーボルド以外の新人も枚挙にいとまがない。全米図書賞の最終候補になったアダム・ハスレットのデビュー短編集『ここでは君は異邦人じゃない』、第二次大戦中の合衆国を強制収容所の日系人の視点から描いたジュリー・オオツカの処女長編『天皇が神だったころ』、18歳の新鋭ニック・マクドーネルによる裕福で礼儀正しい少年が麻薬売買に手を染める『十二』、アラスカ沖の海を舞台にしたデイヴィッド・マージェルのアナーキックな長編『2182キロ

ヘルツ』、1990年の激動のベルリンを訪れたアメリカ人の心的体験を描くアーサー・フィリップスの『プラハ』、などが例としてあげられるが、時代背景や舞台も様々に異なるものが多数出版された。中でも9月に発表されたアレクサンダー・ヘモンの長編第一作『ノーホエア・マン』は注目を集めた。ヘモンは1964年サラエボの生まれ。1992年に数ヶ月の予定でシカゴに滞在したが、その間にサラエボは包囲されてしまい、帰国できなくなってしまったという経歴を持つ。母語のボスニア語で小説を書くことをあきらめた彼は、基本的な英語力しかなかったにもかかわらず、それから5年のうちに英語をマスターすると決心し、1995年に最初の短編を書き上げる。本作品はこうした経験を色濃く反映させ、主人公の男性もシカゴのテレビで故郷の戦争が始まるのを目にするという。作者と主人公が不可分になり、事実と虚構の両方の力を融合させた作品になっていると評価が高い。

中堅からベテラン作家のものでは、批評家からも好評を博し、また一般にもよく売れた作品としてギリシャ系作家ジェフリー・ユージェニデスの第二作『ミドルセックス』をまず上げることができるだろう。「わたしは二回生まれた。一回目は女の子の赤ん坊として1960年の1月の、デトロイトにしては珍しくスモッグのない日に。そしてもう一度は、10代の少年として、1974年の8月にミシガン州ペトスキー近郊の緊急救急室で」という冒頭で始まる本書は、トランスジェンダー遺伝子小説とでも呼びたくなる作品であり、1922年のスミルナにおけるギリシャ人虐殺事件から1960年代のデトロイト、70年代のミシガンを経て、ヒトではなくひとつの遺伝子を人格化して80年間に渡るギリシャ系アメリカ人家族の歴史を辿る物語である。他に、オールバニーの大御所ウィリアム・ケネディのシリーズ七作目にあたる『ロスコウ』が高い評価を受け、『ニューヨークタイムズ』紙の年間ベストにも選ばれた。多産なジョイス・キャロル・オーツは通算38作目になる長編『あなたをそこへ連れて行ってあげる』を上梓、絵画や画家を偏愛するジョン・アップダイクは『私の顔を探して』においてジャクソン・ポロックをモデルした人物を登場させ、戦後のニューヨークがアートの中心地となっていく過程を描き出した。また、ポール・オースターが『幻想の書』を、ティム・オブライエンは『七月、七月』を、スーザン・マイノットが『うっとり』を、それぞれ発表した。リチャード・フォードも最新短編集『数多くの罪』により健筆ぶりを示した。ブラッド・ライトハウザーは五千七百行もの韻文小説『ダーリントンの身投げ』を著し蝶に魅せられた男を描いた。年末近くになってロバート・クーヴァーが『ラッキー・ピエールの冒険』を、ア

ニー・ブルーが『ザット・オールド・エース・イン・ザ・ホール』をそれぞれ発表した。他にもサム・シェパード、キャロル・シールズ、ハ・ジンらが新作を上梓している。故ウィリアム・ギャディスの『アガペー アガペー』が死後出版された。死後の受賞ということでいえば、3月の全米批評家協会賞小説部門には前年末に急逝したW・G・ゼーバルトの『アウステルリッツ』が選ばれていた。ドイツに生まれ、人生の大半をイギリスで暮らした作家であった。合衆国以外の英語圏では、イアン・マキューアン、ヤン・マーテルらのブッカー賞作家が特に高い評価と人気を得た。

メイン州の小さな田舎町の人間模様を綿密に描いた『エンパイア・フォールズ』で4月にピューリッツァー賞を受賞したリチャード・ルッソは、翌月『ザ・ガーディアン』のジェイムズ・ウッドにブッカー賞と比較されていとも簡単に酷評された。前年に全米図書賞の小説部門を受賞したジョナサン・フランゼンも田舎町の家族を描いていたが、今年の、特に新人たちは、彼らと視線の方向や性質が異なっているように思われる。たとえば『三つの六月』、『ラブリー・ボーン』、『ノーホエア・マン』、『ミドルセックス』らに共通すると考えられるのは、内側から外を見つめようとする視線と外側から米国国内を見つめようとする視線の交錯であり、また、時には遺伝子レベルまで遡った個人の記憶を重視する姿勢である。「9・11」によって二分されたアメリカ合衆国は、その一周年を終わらせると「正義」や「自由」という言葉でイラクへの戦争を正当化する言説活動を加速させていく。ブッシュ大統領が「アメリカ」や「我々」という言葉で前提する人々のなかに、「自分」が含まれているのかいないのかと問うことによって米国の市民／作家はさらに二分されている。合衆国政府の言説は一方で外側への眼差しがあるように装いながら、他方では視線は依然として内側だけを向いている。その間のギャップこそが二分された米国の根元的な矛盾である、とするのは言い過ぎだろうか。仮にそうだとすると、もちろんそれは合衆国に限ったことではない。

(5) 2003年の総括

本年2月12日にローラ・ブッシュ大統領夫人の主催で行われることになっていたホワイトハウスでの詩のシンポジウム「詩とアメリカの声」は、その二週間前になって急遽中止となった。著名な詩人たちを大勢招いてホイットマンやラングストン・ヒューズらの詩について語り合う「文学的な」会になるはずが、イラクとの開戦についての抗議の声を上げる政治的な場になろうとしているこ

とをホワイトハウス側が察知したからである。しかし、これを切掛けに戦争反対を求める詩人たちの抗議運動は全米のみならず世界中に広がり、開戦後もインターネット上で活発に続けられている。代表的な成果として11月に出版された詩のアンソロジー『ポエツ・アゲinst・ザ・ウォー』がある。こうした声が、いわばその響きを好むと好まざるにかかわらず、今年の米国文学の通奏低音になっていることに疑いはない。

11月の全米図書賞の小説部門にはシャーリー・ハザードの『グレート・ファイア [大火]』が選ばれた。1947年、占領下の日本（広島近郊）を舞台として、著名な作家の息子である32歳の英国人少佐と17歳のオーストラリア人少女と出会いを軸に、一方で個人の希望を無化していく戦争（歴史）の脅威を描きつつ、他方で文学（言葉）によって回復される力の可能性を模索している。派手さのない本作の受賞に疑問を投げ掛ける向きも一部にはあったようだが、このような内容と精緻な知覚表現とを合わせ持つ本作の受賞が示唆するコンテクストは深長である。ハザードは1931年シドニーの生まれ。幼少よりニュージーランド、香港、英米などを転々とし、若干16歳（1947年）にしてイギリス情報部のために戦後の中国内乱について報告したという経歴も伝えられている。小説は他に三冊ばかりと比較的寡作といえるかもしれないが、過去二回全米図書賞の最終候補に選ばれ、そのうちのひとつは全米批評家協会賞を受賞（1980）している。

全米図書賞の候補作のうちで『ニューヨーク・タイムズ』の「エディターズ・チョイス」にも選ばれたのは、エドワード・P・ジョーンズの『知られた世界』と、T・コラゲッサン・ボイルの『ドロップ・シティ』である。前者は1850年代の奴隷制時代における不撓不屈の人間像をパワフルに描き出し、後者は1970年代のヒッピーたちがアラスカに移住して体験する理想と挫折を共感溢れる筆致で浮かび上がらせているという。共にそれ以前の作品にはなかった境地に達していると評された。他に、1970年代のブルックリンにおける異人種間の友情を題材にしたジョナサン・レセムの『孤独の要塞』や、インド系家族の30年間のなかに故郷追放とアイデンティティというテーマを織り込んだジュンパ・ラヒリの処女長編『同名の人』、マリアン・ウィギンズの『見えざるものの証拠』なども評価が高い。

ベテランも健在である。リチャード・パワーズは待望の新作長編『タイム・オヴ・アワ・シンギング』を年明け早々に出版、ドン・デリーロが『コスモポリス』を、W・ギブソンは『パターン認識』をそれぞれ発表、また中編三部構成という独自のスタイルを誇るS・ミルハウザーも『キング・イン・ザ・ツ

リー』を上梓した。トニ・モリソン, J・C・オーツ, ポール・オースター, ニコルソン・ベーカー, フレデリック・ブッシュらの新作も注目を集めた。J・アップダイクも比較的初期の作品を集めた回顧的な短編集を出版した。『他者の苦痛へのまなざし』を上梓したスーザン・ソントグは, 10月にドイツの出版図書協会から平和賞を授与され, 授賞式のスピーチで政府の対イラク政策をあらためて批判した。スティヴン・キングは全米図書賞の特別功労賞を受賞した。

他にもルース・L・オゼキ, スーザン＝ローリ・パークス, チャールズ・バクスター, チャック・パラニュークなど, 挙げ続ければきりが無い。米国以外の英語圏では, カナダのベテランM・アトウッドやイギリスの新人モニカ・アリが極めて高い評価を得た。物故者には米国での受賞も多かったカナダのキャロル・シールズ, 先住民文学の指導的役割を担っていたジェイムズ・ウェルチ, 詩壇の大御所アラン・デュガン, そして, エドワード・W・サイードらがいる。

3 まとめ

以上のような年度別の総括から抽出されうる傾向として, ひとまず次の三点を指摘することができるのではないだろうか。

- 1) マイノリティへのまなざし, 「個人」へのまなざし
- 2) 「9・11」からの衝撃と反動
- 3) 国外の戦争と国内の反戦運動

1999年から2001年の9月11日までで区切った場合, その期間に共通する特徴としてまず上げられるのは, マイノリティ作家の, あるいは白人マジョリティとは関わり薄いマイナーな小説舞台が, 主要な文学賞を授与されたという事実である。1999年度全米図書賞と2000年度ベン・フォークナー賞の両方を受賞した中国系アメリカ人ハ・ジンの『待ち暮らし』などは, 「アメリカ」がどこにもでてこないという意味でその典型である。同様に, 韓国系のチャンネ・リーの『最後の場所で』が1999年にハードカバーのままベストセラーになり, インド系のジュンパ・ラヒリの『停電の夜に』が2000年のピューリッツァー賞を獲得していることも, この傾向を裏付ける代表的な例といえる。エスニックなマイノリティのみならず, 2000年の全米図書賞を受賞したスーザン・ソントグの

『イン・アメリカ』が19世紀のポーランドの女優や作家をモチーフにしたことは、同様に「アメリカ」を中心とせず、歴史的・地理的なマイノリティを描いたという点で、この傾向の線上に乗るものと考えられる。さらに、この眼差しは2001年のアン・パチェット『ベル・カント』へと引き継がれ、「9・11」を踏まえた上で、2002年におけるジュリア・グラスの『三つの六月』やジュリー・オオツカの『天皇が神だったころ』、そしてW・G・ゼーバルトの『アウステルリッツ』とアレクサンダー・ヘモンの『ノーホエア・マン』へと続き、2003年全米図書賞のシャーリー・ハザードへと受け継がれていると見ることができる。

こうしたマイノリティへの視線が、白人中産階級というマジョリティからすればいわば「外部」に向けられたものであるとするならば、逆に「内部」への視線も一貫して途絶えてはいない。この視線に特徴的なのは、米国の典型的な田舎町における個人の生活を見つめ直し、肯定しようとする欲求である。1999年に注目を集めたケント・ハルーフの『ブレインソング』は「アメリカのハートランド」にある小さな町を舞台にしたものであり、また、「9・11」の直前に発表され2001年の全米図書賞に輝いたジョナサン・フランゼンの『コレクションズ』も中西部を舞台にした白人中流階級の家族の物語である。そして、この傾向は、一方でメイン州の小さな田舎町の間人模様を綿密に描いたりチャード・ルッソの『エンパイア・フォールズ』（ピュリッツァー賞）につながり、他方で「9・11」の記憶をコンテキストとしてみた場合に、2002年アリス・シーボルドの長編第一作『ラブリー・ボーン』を驚異的なまでの長期ベストセラーにし、またギリシャ系作家ジェフリー・ユージェニデスの『ミドルセックス』に全米批評家協会賞を受賞させた流れと関連づけることができる。ユージェニデスの場合には、ギリシャの歴史を含み込んでいるという点において「外側」に向かう視線があり、人ではなく遺伝子を「主人公」に仕立てた点においては、極限的な「内部」への視線をそこに読み取るとことも可能である。こうした外部と内部への両方の視線が交錯する領域の作品としては、2001年のピュリッツァー賞受賞作であるマイケル・シェイボンの『カヴァリエ&クレイの驚くべき冒険』も含めることができるだろう。

「9・11」以後の傾向として明白なのは、やはり「戦争」がモチーフとなっている作品が目立つことである。もちろん2002年の『2001年9月11日——アメリカの作家たちが答える』や『101ストーリーズ——9月11日の後ニューヨークは書く』などの「9・11」以後を直接題材にしたものや、2003年の『ポエツ・

『アゲンスト・ザ・ウォー』など反戦を訴えるアンソロジーはあるが、「虚構」として「9・11」以後を扱っているものには主としては二つの共通点があるように思われる。まず一つとして、例えば前述したアレクサンダー・ヘモンの『ノーホエア・マン』, そしてシャーリー・ハザードの『グレート・ファイア』に代表されるように、いずれも「外国を戦場とした」戦争が描かれているという点である。この特徴は一方で、2001年のアフガニスタンへの軍事攻撃から2003年のイラク戦争に至る米国の「テロとの戦い」という「大儀なき大儀」（いずれも証拠や根拠が政府側から未だ明示されていない）と間接的に関わっていると推察され、また、他方では、例えばフランシス・フクヤマの「9・11」に関する次の指摘を想起させるものとなっている。すなわち「真珠湾奇襲攻撃以来、敵がアメリカ本土でアメリカ人を殺害することは不可能であった。またあの事件も遠く離れたハワイで起こったことだった。ワシントンDCは、米英戦争の最中の1812年に、イギリス軍がホワイトハウスを焼き討ちして以来攻撃を受けたことがなかった。…アメリカの領土はつねに安全な避難場所であるとみなされていたのだ」(28)。

二番目の共通点は、「虚構」である文学の存在理由とも関わる特徴である。それは、「9・11」以前からの流れである個人の視点や記憶を重視し、いわば「声なき声」に言葉を与えようとする、虚構のみに可能な「証言」としての文学の力である。アリス・シーボルドの『ラブリー・ボーン』が既に死者となっている少女の声を回復させていることに注目するならば、その少女が暴力の犠牲となったせいで現実には決してその声が聞かれることがない立場の人物であることは重要視すべきではないだろうか。『ラブリー・ボーン』をあくまで大衆小説としてしか見ない向きもあるだろうが、「9・11」という〈トラウマ記憶〉によって声を奪われた米国一般市民、というコンテクストを踏まえた時にはじめて、同書が一年以上もの長期に渡ってベストセラーの上位に留まり続けた理由が見えてくるように思われる。それは、しかし、あくまで「安全な避難場所」にいたものが被った被害者意識を裏側から色濃く反映させているだけと批判される可能性があるかもしれない。しかし、翌2003年にシャーリー・ハザードの『グレート・ファイア』が評価されたことと、『ラブリー・ボーン』の商業的成功との関連性を熟考するならば、暴力（レイプ・戦争）によって強制的に無化されてしまう個人の希望／自由こそが共通してその中心に据えられているといわざるをえないのではないか。「虚構」としての小説は、そのように無化していく力を可視化し、また無化されていく人々の声を回復させようとして

いるのである。

「9・11」以前には分離していた、マイナーなるもの／外部であるものへの眼差しと、平穏で平均的な「田舎の生活」を語ろうとする内側への眼差しは、「9・11」を切っ掛けに、そしてそれ以後の国家的な軍事行動の拡がりとともに、その方向性を次第に融合させてきたと暫定的に結論づけることができる。米国本土がもはや「安全な避難場所」ではなくなったという不安と、戦時における個人の相対的な無力化／無階級化こそが、「内と外」との区別を曖昧にしていることもその視線の融合の遠因であろう。確かにナショナリズムを極端に強調し強要しようとする言説は実際にあり、それによって「反マジョリティ」を唱える声が抑圧されるという現実の危険はあるにせよ、少なくとも未だに小説は「虚構」であるがゆえに、直接的な政治性からはある程度の距離を保つことが許容されているように見える。だからこそ、絶えず戦争を正当化しようとする大統領や政府の言説に対して、「虚構」としての小説は、読者／市民にとってどのようなオルターナティブが可能かを示す明確な指標になりうるのである。そして、「敵と味方」という二分法を、内側と外側の両方向からあらためて問い直そうとする「声なき声」そのものとして、自らを可視化させることが可能なのである。

注

- (1) 「年度別総括」で使用した文章の初出は以下の通りである。ただし、以後に発表された邦訳などを踏まえてタイトルの邦題などは変更してある。また、必要な修正・加筆を施した。

「1999年総括」長岡真吾「海外文学・文化回顧」「1999アメリカ 熱狂なき豊穡」『図書新聞』1999年12月25日 2467号 p.7

「2000年総括」長岡真吾「海外文学・文化回顧」「2000アメリカ マジョリティからマイノリティへ」『図書新聞』2000年12月23日 2515号 p.5

「2001年総括」長岡真吾「アメリカ文学の現況と翻訳・研究' 01」2002年7月20日、新潮社、日本文藝家協会編『平成十四年版 文藝年鑑』 pp.71-74

「2002年総括」長岡真吾「アメリカ文学の現況と翻訳・研究' 02」2003年7月20日、新潮社、日本文藝家協会編『平成十五年版 文藝年鑑』 pp.73-77

「2003年総括」長岡真吾「海外文学・文化回顧」「2003アメリカ イラク戦争反対の声が通奏低音に」『図書新聞』2003年12月27日 2659号 P.6

主な引用・言及文献

- Chabon, Michael. *The Amazing Adventures of Kavalier & Clay*. New York: Random House, 2000.
- Eugenides, Jeffrey. *Middlesex*. New York: Farrar Straus&Giroux, 2002.
- Franzen, Jonathan. *The Corrections*. New York: Farrar Straus & Giroux, 2001.
- フクヤマ, フランシス 「「アメリカの例外的な立場」の終わり」末廣幹訳, 『現代思想臨時増刊号』Vol.29-13 (2001年10月)。
- Gould, Stephen Jay. “Introduction: To Open a Millennium” S. J. Gould and Robert Atwan, eds. *The Best American Essays 2002*. New York: Houghton Mifflin, 2002.
- Haruf, Kent. *Plainson*. New York: Knopf, 1999.
- Hazzard, Shirley. *The Great Fire*. New York: Farrar Straus&Giroux, 2003.
- Hemon, Aleksandar. *Nowhere Man*. New York: Nan A. Talese, 2002.
- Jin, Ha. *Waiting*. New York: Pantheon Books, 1999.
- Lahiri, Jhumpa. *Interpreter of Maladies*. New York: Houghton Mifflin, 1999.
- Lee, Chang-Rae. *A Gesture Life*. New York: Riverhead Books, 1999.
- Patchett, Ann. *Bel Canto*. New York: HarperCollins, 2001.
- Sebold, Alice. *The Lovey Bones*. New York: Little Brown, 2002.
- Sontag, Susan. *In America*. New York: Wheeler, 2000.